



もいおかYMCA ニュース



学習障害(LD)を考える。

通常、クラスに1~2人いると呼ばれている学習障害(LD)児と呼ばれてる子どもたち。学習の場で援助を必要としています。周囲に理解されずに悩んでいる子供達に自信を持たせ、可能性を育てていくことがもためられています。

学力や行動面に問題を持つ子

知的能力に大きな遅れがなく、学力や行動面にいくつかの特有の問題を持つ子供達がいます。LD児とその周辺児は一般的に通常学級に1~2人いると言われています。家庭のしつけや、情緒の問題などが、直接の原因ではなく、子ども自身の脳の働きに関係する原因が推定されます。こういう子どもたちは目は見えている、耳は聞こえているのに、うまく見分けたり聞き分けたりすることが難しく、クラスでは先生のいったことを何度も聞き返したり、要領よく板書をノートに写しとることができなかつたりします。

知的な遅れが顕著でないということと、自閉症児が示すような対人関係障害を持たないというのが大切なポイントです。

LDの疑いがある場合、大騒ぎをする必要はありませんが、広い概念つまり「やや発達にかたよりのある子ども」でとらえておき、経過を追う必要があります。「心配ありません、そのうちに追いつきます」「こんな子、ほかにもいます」という言葉はきやすめに過ぎません。ただ、極端な不安やあきらめは不要です。

学習障害(LD)とは



LDは、教育の立場から始まった用語であり、子供が教育現場で学習を始めた時に「書く」「聞く」「話す」「読む」「計算」「推論する」などの教科学習の基礎となる学習能力に特異な問題をもつ場合を言います。学習障害という言葉は「Leaning Disabil-

ity」、学習に学びにくいところを持った子供達という意味ですが、最近では「Leaning Difference」という言葉を使い始めています。これは障害ではなく、学び方が違う子供という意味です。

LDの疑いがある場合は

最近では、親の意識の高まりから幼児期にLDを疑って専門機関を訪れる方が増加しています。幼児期の特徴は、発達遅滞をもつ子どもや、自閉症と呼ばれる子どもの特徴とも重なりますが、基本的には

基本的なスキルが身につけにくい

LDはごくごく基本的なスキルが身につかないことが特徴です。基本的なスキルというのは、何度か意識的に練習していかないとできないことではなく、自然にできるようになる行動です。基本的スキルには自転車のこぎ方、縄跳びや水泳の足のタイミング、文字の書き順、着脱の順番等が含まれます。LDは、不治の病の宣告ではなく、希望に繋がるように、「予防的取り組み」を行うのが最善の方法とされます。

子どもがLDではないかと思ったらなるべく早く大学や病院、市町村の教育研究所、児童相談所等に相談しましょう。

検査を受け適切な指導を受ける

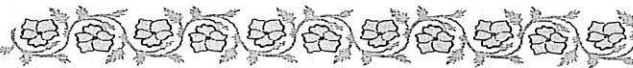
学習障害の可能性があり、特別な工夫の仕方を知らない場合でもマンツーマンでゆっくりと教えることで少しはできるようになります。しかし、それには限界があり、やはり検査を受け、適切な指導を受けることが必要です。

生きていくために必要な力を身につける

子どもがLDであるとわかった時点から、両親や教師がその子どもの特性を理解することが重要です。親や教師の無理解な態度や対応によって、学習上の問題のみならず、意欲低下や自己評価が低くなり、反抗的な行動をとるなど人格形成にも影響を与えていきます。この結果、小学校の高学年から中学校では不登校、家庭内暴力といった社会不適応をも引きおこしかねません。学力だけでなく、適切な時期に、必要な内容で、教育現場と家庭が協力をしながら適切な指導を進めていく必要があります。

LD教育という場合、読み書きといった部分的な学習の援助と考えがちですが、実際には子どもの発達に添った長期にわたる全人的な教育をさせています。まず自身を回復させ、自分自身のことを見つめて、自分という人間を理解していくことが大切で

す。ソーシャルスキルを中心とする「生きていくために必要な力」を身につけていくことが、重要な課題です。



編集協力

竹田契一・大阪教育大学障害教育講座教授／西岡有香・西宮YMCA LDサポートプログラム主任講師／水田めぐみ・大阪西YMCAサポートクラス専任講師

参考文献

LD児の言語・コミュニケーション障害の理解と指導（日本文化科学社）・ぼくのことわかって！（朝日新聞大阪厚生文化事業団）・別冊東京青年NO. 334（東京YMCA）・LD児はどこでつまづくか（日本文化科学社）

LDクラスを担当して

大阪西YMCA 水田 めぐみさん



自信をとりもどしてほしい

学生の頃、授業に充分ついていけないうちから「できない、しない。」と拒否したり、ふざけてごまかしたりすることもありました。子ども達の得意な部分を見つけて、「こうすればできる」という方法は何か、家庭や学校でも工夫できることはないかと一緒に考えながらクラスを進めています。子ども達には自分のことを好きになってほしい、クラスで仲間とのびのび過ごして、少しでも自信を取り戻してほしい、といつも願っています。

☆今回の記事は、大阪YMCAニュース4月号の特集です。

☆今回の記事は、大阪YMCAニュース4月号の特集です。

に出会いました。子どもの得意な能力を生かして、苦手な部分を補う指導法がいかに大切かを改めて実感させられたのを覚えています。その後、大阪教育大学大学院でLDについて学びながらクラスを担当するようになり、今は専任として関わっています。数学は得意だけど作文はどうも…というような得意、不得意は誰にでもあることですが、LD児の場合はこの差がとても大きいのです。友達と同じくらいかそれ以上にできることがあるのに、一方ではみんなと同じ方法でたくさん練習しても、うまくできないこともあるのです。その内容は漢字の書字や算数の筆算、文章題を読んで理解するなど子どもによって様々です。友達関係がうまくいかない子どももいます。そういえば小さい頃、ことばがなかなか増えなかった、「ほら見て。飛行機が飛んでいるよ。」と指した方向を見ることができなかった、というような発達のアンバランスができないことと結びつい

学習障害理解セミナー

共催：盛岡YMCA、岩手LD児を守る親の会
期日：10月1日
時間：13:00～16:00
講師：緒方 明子先生
 (明治学院大学助教授)
場所：岩手県高校教育会館
参加費：1,000円
内容：
基本理解と小学校における取り組み例